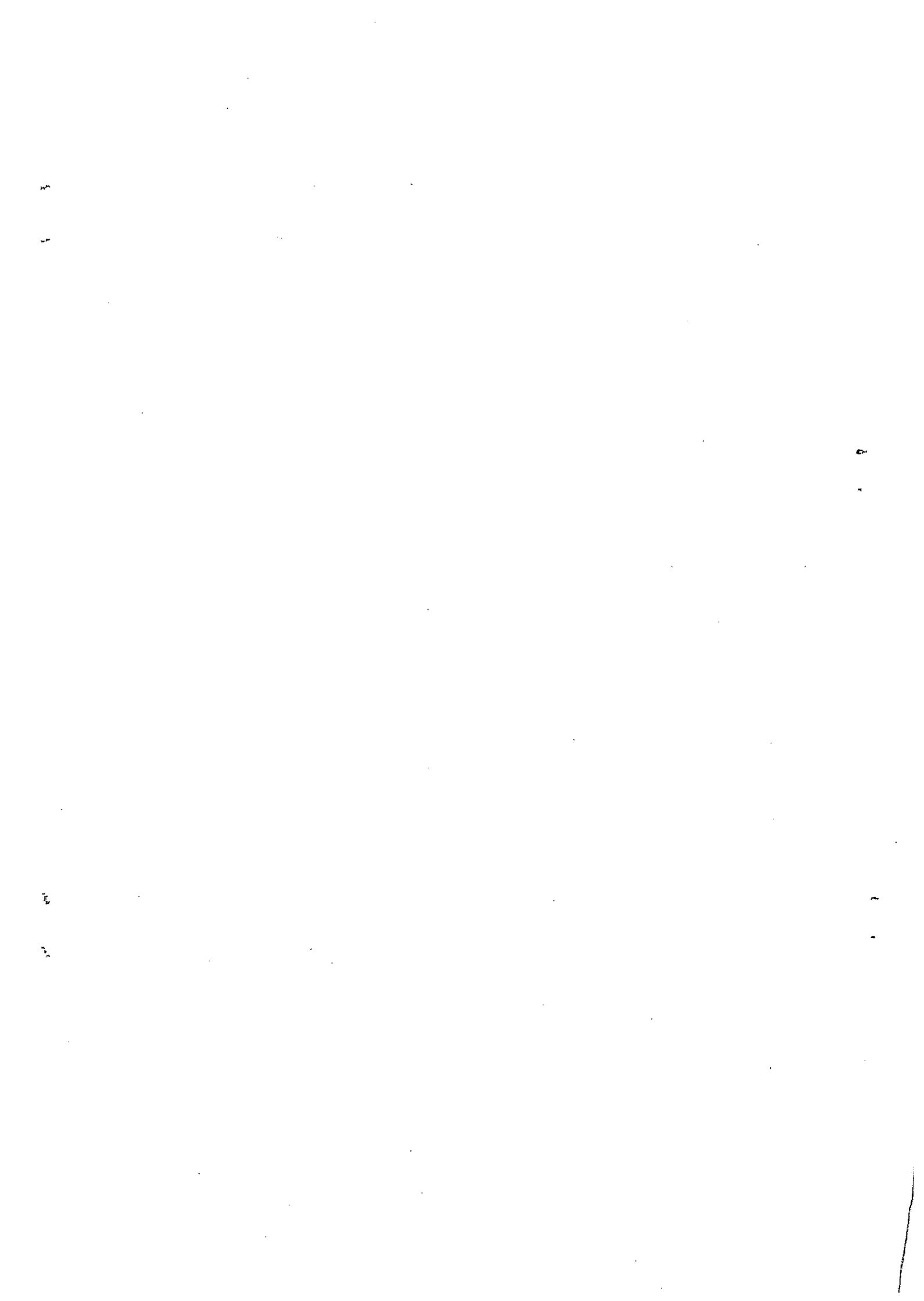


徳島新聞連載

『天職に生きる』

元 日商株式会社々々長
(現 日商岩井株式会社)

落合豊一自伝



天職に生きる

(1)

落合豊一



徳島に生るうけ つき進んでこられたというところから、いつの間にか。これから記そうとする想い

やら六十年もの歳月が流れ去っている。暮しのんでみると、まるで夢のよう。ただ、ただ自身自身の至らなき、未熟さのみが想い出されて恥し入るばかりだ。いまさら、自分自身の回顧録などは、面はゆい感じて筆も遅々として進まないが、ただいえることは、自分自身の進んできたひとすじの道が、私自身にとつては、これがだから授けられた道であると信じられ、そればかりを念頭にまっしぐらに

つぎ進んでこられたというところから、これから記そうとする想いだ。これから記そうとする想いの数々が、郷里のみなさんになんらかの形で少しでも参考になれば、私の幸いこれに過ぐるものはない。さて、なにかから話をしよう。やら記憶をたどるにも、まことなにとどしい限りだが…。



私が生れた板野郡の生家だが…六十年の歳月のうちに、住む人も変り、二階建瓦葺の家が建つなど、すっかり昔と模様替えている。

する。とりわけ、夏ともなると夜な夜な、カンテラをともしたありありと眼にうかんできくる。

寝床で、切った藁をは込んで酔させているありさまなど…。

り、いわゆる半農、半商の生活であった。

私の母の名は、あいの。この名は土地の産物の藁に通じ、また当時女名前の末尾に「の」の字をつける習慣からきたものらしい。また父は助右衛門という名だった。家計は余り裕福というわけではなく、まあ中流といのくらしだった。

ここで、私の一生にとつて切っても切れぬ因縁となっている祖母「キク」のことがなつかしく、またありがたく、よみがえってくる。

昔の人にありがちな中肉中背顔はふっくらと柔和な感じ、いつも慈悲深い眼で、じっと、孫の私を見つめていた祖母。それは私の魂の奥底まで見透しているような眼でもあった。

広い庭で、夜通し藁をナタで切っている光景や、またそれらの農家がいずれも蔵をかまえ、その米を買い出し、これを問屋に売る米の仲買みたようなことをや

天職に生きる

(2)

落合豊一



祖母キクの夫、もなひ八月半ばころの語

私にとって、祖父辰三郎は非常に真面目な正直者で、たえずコツコツと励む人であったらしいが、私が生れてまもないある年の妻の収穫時、妻の穂で、左眼を刺し、ついに失明するに至った。そのせいもあったが、祖母はよく雙眼の夫を助け、真先に畑にでて、たとえ黙々と働いていた。その姿がなんともいえない輝きとして記憶に残っている。

その後、祖母の病案で、私たちが一家は徳島の前川町に移った。私が小学校に入学してから間

もなひ八月半ばころの語だ。なんでも、同じ米の商売をするなら人口の多い徳島市の方がよい。また、こどもの教育上からも徳島市の方がよいとする祖母の意見から決ったものだという事だった。

その後、私が当時の落合家にとつてはふさわしく

らぬ上級学校に次々と進学出来たのも今にして思えば祖母の教育熱心な理解の賜物であった。こんなこともある。私が北島の尋常小学校から初めて徳島市



確か祖母が六十四歳の正月を迎えたときにうつしたものだ。当時私は助任小学校の二年生ぐらいたった

助任小学校に転校した最初のころだ。私を初めて学校につれて行ってくれたのが、ほかならぬ祖母なのだ。そして先生にはも

お陰で私は案外早く、クラスの連中になじむことが出来た。私よりもっと健康体であったし、それに、前川町から最初のうち、しばらくは片道一里半ばかりある北島小学校に通学もして

ちろん、クラス・メートのことも、もたにもいちいち、鉛筆と葉子を与えて「よろしく、細みます」と頭を下げておられた姿は私の頭から消えない。こうした

きく大将になっていたようだ。当時建築中だった近くの工務学校の広い校庭で毎日、相撲をとり、またけんかなどとして、そのたびに、いつも層物のソテをフツフツにちぎっていた。「しよりのないいたすらっ子が」と両親にしかられても、祖母は「まあ、まあ元気にこしたことはないワ、なによりもまず健康じゃチ」といって、つねにかばってくれていたようだ。こうして、私はますます臆白小僧となっていたが、その代り骨格もみるみるたくましくなり、立派な健康体がかたちづくられていった。そのころである。アジアの風雲いよいよ急を告げ、ついに日露戦争がはじまったのは……。

(筆者は日商株式会社社長)

天職に生きる

(3)

落合豊一



召集令状をうけた若者たちが一人、一人タス手掛けて小学校の校庭に集り、町内の人々の「バンザイ、バンザイ」の歓呼に送られて勇躍戦線に発っていった。

そして旅順陥落祝勝の旗行列に血をわかしながら「ワイ、ワイ」はしゃぎ回っていたことも忘れ得ぬ印象だ。

私はまもなく尋常四年を卒業して、寺島高等小学校の一年生となった。そのころの私はいつも授業を終えて帰宅すると、家にある精米のウスをふんだりに押したりするほか、一斗入

の私は家業が忙しいため、帰宅してからゆっくり復習といことよりか、運動方面であれば



徳商三年のとき、級友たちとうつす
(最前列に居るのが私)

たので、もっぱらノートを使用せず、授業時間中に先生の講義をそらんじてしまう方法を選び、苦勞しながらもなんとかやりとけることが出来た。お

けで成績は首位、本科に進んで特待生となり、授業料なしで第

一回卒業生として学業を終えることが出来た。しかし、学業の

当時、柔道部を中心としたま

あ御派に属する連中十四、五名

で「鉄脚クラブ」と称するグル

ープを作っていたが、いつた

たか、雪のちびつく寒い夜、板

東町の大麻神社へ向は、徹夜

行進を開始した。連中は一本の

長サ才を持ち、ねむくなったら

このサオにつかまり、睡魔と戦

うのである。このグループの連

中には元ホルル総領事だった

喜多長雄や、元大日電線監査役

反田喜平、徳島商工会議所事務

局長細奈部総次郎、現在アメリカ

力居住の梅塚保通諸氏がいた。

梅塚氏は一行のなかでも最も肥

満しており「ソウ」というニック

ネームだった。

たことの方が、より一層、記憶に残っている。私は腕力も強く、スポーツ方面はなんでも好きだ

天職に生きる

(4)

落合豊一



雪の夜の行進で、ことくかけ込み、食うわ、食うは、この「象」君、出発するとわ、茶屋の老夫婦、目をパチクきはなかなかの元気、田舎道を、りませながら、ご飯をたき出す大声で歌いながら進んでいった。こと三六人にもおよび、最高記ものだが、大麻神社につくころ、録が象君の廿一杯。私がこれにから夜はシンシンとふけた。ついで、なんと十六杯も平けた。り、寒いこと、心細いこと、このだから、その空裏ふりが想像の上もない。それに第一、めし、されようというもの。私は当時を持たずに行つたものだから「第五」というニック・ネームまらない。一行ググウ腹の虫で通っていたが、これは私が柔をならしながら、ほうほうの態道以外に水泳にも自信があったで帰ってきたが、このとき、吉とところからきたものらしい。な野本町あたりで、一軒の茶屋が、んでも背阿波藩に椿油の糞甚五店開きしているのを発見した。兵衛とかいう水泳の達人があつたときうれしき。連中、脱鬼のたらしい。

ある年の夏のこと。例のごとく、米を荷車で運搬する途中、前川橋にさしかかった際、ワイ、商議高校を卒業するに当って、



徳商を卒業して三日目、仲のいい「象」君と記念撮影におよんだ。(向って右が私)

た。助任川でもおぼれかかっていた当時小学六年生だった板東定一君を救助したことがある。こうして、豊多き青春の徳島が南洋方面に進出してゴム園を作り、成功しているという話を聞いた。私は矢もタテもたまらなくなつて、徳商黒沼校長にこういったものだ。向なんとかして南洋にやって下さい」と...

だが、校長先生のお骨折りにもかゝらず、そついった方面の就職口は容身に見つからなかつた。私はついにこれを断念、祖母のすゝめに従つて神戸商商を受験することにした。

同時に、両親にこれ以上の負担をかけまいと、県からの貸費学生の資格をえ、無試験制度により首尾よく入学することができた。

ワイ黒山の人ばかりだ。のぞいてみると、近所の「よっちゃん」とかいう子どもが水の中でアップ・アップだ。すぐさま真いて熱情やみがたきものがある。バダカになり、無事救出したが、そのときからすてじ、こ

天職に生きる (5)

落合豊一



神戸高商には、

民と知りあい、同氏の紹介で当

私のほかにもう一人、まきに 時の徳島毎日新聞社の須藤社長

「象」のニック・ネームで登場 から「家庭教師をするのなら世

した梅塚保通君が受験したが、 話しよう」というありがたい話

やしくも不合格。この梅塚君と があり、そのお骨折りで、大阪

のちにアメリカで再会すると 市東区上末町五丁目金沢種次郎

ういききつがあるのだが、そ 氏方で、家庭教師となることか

は後日の話として……とにか できた。

神戸高商にバスしたときのお での、郷里の後進のためには学資

しきはなんにもたどえようの まで出して人材を育成した立派

いほどだった。

私はしばらく、神戸高商の近 なる人格者。元大蔵大臣藤井真信

の「聯合館」という下宿屋に 氏を始め、元京大総長馬場利三

らしていたが、ほとんど神戸 郎氏、地方長官をつとめのち

新聞の経済記者である真杉宣雄 に三井の社会事業部の主宰者と

なつた山口安憲氏など、いずれ も直接、間接に金沢氏の恩恵を 受けてゐる。

私はここ

で、当時天王

寺中学に入學

早々だった長

子國雄君の勉

学のお世話を

しながら、同

家に住込み、

食事、交通費

一切の面倒を

見てもらつて

いた。その後

國雄君が健康

上の必要から神戸市鎮水の別荘

に移った際、私も一緒に転居

し、静かな環境のなかで、面白

いほど、勉強に励むことが 出来た。生活的にも余裕のない のだ。同時に、卒業論文も書か

私が無事學業を終え、今日ある には一に金沢氏の恩恵の賜とい

は一に金沢氏の恩恵の賜とい



神戸高商三年生当時、新開地をぶらついて その帰り途だった。(向って左端が私)

なくなった。卒業が迫ってきた のだ。同時に、卒業論文も書か

なくてはならない。私は神戸高

商に在学中の全てを、この論文

に集中しようと、卒業する一年

前から準備にとりかかった。ま

ず金沢氏宅を辞して阪神沿線の

とある「ナダ」の農家の門ツキ

の一室を借りた。自分だけの勉

強に一心不乱となつたのだ。部

屋代が月九円くらいで安かつた

せいもあるが、その一室の隣り

が牛小屋で、とき折、牛がバタ

バタあはれ、そのたびに、部屋

が揺れ動くが、それさえ辛抱す

れば四圍は静かだし、まあ勉学

に大した支障はなかつた。

さて、論文だが、どんなテーマ

がよいか。私は日夜、そのこと

ばかりを念頭においていた。折

も折、世にいう米騒動なるもの

が各地に起つた。

天職に生きる

(6)

落合豊一



一石十八田の米がと、学校の図書館にとびこんだ一筆に四十五田まで暴騰し、ついに富山県下で地方漁民のおかみさん達がむしる旗を押し立てて、県庁に押しかけるという事件が起り、物情騒然、ときの仲小路農商務大臣が暴利取締命令、らに考えなやんだ。その結果、る伝家の宝刀を抜き放ってようやくにして事態の收拾を図ったという時代だった。

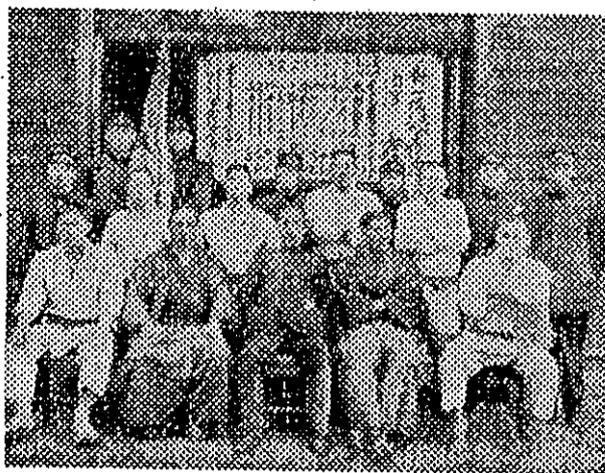
もともと米風のセガレだっただけに、私の米に対する関心は人一倍。「そうぞう、日本を救うは食糧の需給にある」と、卒論論文もこれに没頭しよう

つねに不安定だ。

その点、白色人種が常食として

た。そこで卒論論文にはせひ

考にすべきだ。との結論に達し



東京高商との柔道対抗戦で、私のいる神戸高商が勝って、その後につづ。当時私(真中の列左から三人目)は初段だった。

『小麦』

に関する

研究を

と考へ、

文献をひ

もどいた

ところ、

これが案

外少な

い。結局

約一年間

がかりで

『日本を

中心とす

ている小麦はどうか、これは米とくらべて比較にならぬほど生

ていたことが、後年、アメリカのシヤトルに渡ったころ、大いに役立つのであるが、まさか、実際に小麦の事業にたずさわるとは少くも学生時代の私には想像もつかないことだった。いまにして思うことだが、学生時代の勉強が後年になっていかに役立つものか。夢おろそかな気持で過してはならないということだ。

論文も書き終り、いよいよ卒業が近づくとつげ、いままでの学生生活の総決算というワケで、そのころからホツポツ酒をたしなむようになった。もちろん神戸高商時代もずっと柔道部に奮を置き、もっぱら硬派のグループに入っていたわけだが、のめばのむほどに酒が好きになり、かれこれ一升ぐらひは軽く平らげていたようだった。

天職に生きる

(7)

落合豊一

正木 契 村 画



卒業前のある晩、徳島県出身はなかった。

ばかりで作った「徳島友団」グループと神戸新聞地付近でんぎ飲み回ったあげく、一升を提げて独りで帰途についたが、電車はなく、結局二里かりの道をやつのことで下になどついたものの、部屋間違えて牛小屋でのびてしまふ。あくる朝、なにか顔が冷たのでふと、眼を覚ますとなんことばない「ウモー」とはか、牛にめられていたのでか、余くこれくらい驚いたこと

いつもアホウの一つ覚えみたい
に酔っぱらうと鬨子外れの高い
声で歌っていたものだ。

卒業が間近になるにつれ、あ
ちらからも、こちらからも就職
の口がかかってくる。現在の就



で、非常な好景氣、ムコ一人に
会社が入つとまでいわれた時代
である。卒業者の全員に対して
各会社から猛烈な引抜き合戦が
行われた。ひどい会社になると
卒業する一年くらい前からレス
トランや、料理屋にまで学生
を招待して、強引に就職させる
例もあり、いまで

当時満廿二歳、いよいよ実社
会に一歩足を踏み入れたので
ある。
鈴木商店に入社すると同時
に、まず外国通信課に勤務し
た。ここでは世界各地に散在し
ている出張所や、支社との間の
通信などについて連絡をつづけ
ていくのである。三ヶ月のの
ち、こんどは受渡部に回され
た。ここでは主として倉庫係を
やらされたが、これがなかなか
かどうして、なれるまでが大変
なのである。毎日人力車に乗っ
ては倉庫回りをするのである。
そして、入庫の数と、帳簿上の
数が間違っていないか、一々チェ
ックしていくのだ。当時電気銅
の輸出が非常に盛んで、倉庫の
中にはいつもギッシリ電気銅が
山積みされていた。

職離時代から考えると、まるで
ウソのようなが、その当時は第
一次大戦は、猪まもないころ
大正六年の春である。私は

入社することとした。

天職に生きる

(8)

落合豊一

正木契村画



電気銅の計量

をするときに、その桿をきめる
方法が非常にむずかしい。初心
者の私にとってはつきからつき
へと目にもたまらぬ早業でチキ
バキ処理されていくのを見る
と、果してこれで正しいのか、
どうかトッサには判断しにく
い。「ちよつと、いまのところ
変だからもう一度やり直して
れ」なんていうもんなら、涙の
荒くれた仲仕たち、眼をむい
て「一々、そんな悠長なこと
うごたら、仕事もなにもでき



ない」とものす
ごいけんまく
だ。結局、こ
の倉庫係を三か
月ばかりやった
が、どうしても
熱練の域まで達
しなかった。そ
うこうするう
ち、突然八月半
ばのひる下り、
支配人室からの呼び出しがあっ
た。「一体何事だろう。なにか
お叱りでもうけるのか」半信半

疑で支配人室に入った私に下さ
れたのは、なんと「海外派遣」
の命令なのだ。そのときの響
び、いまに至るも到底忘れるこ
との出来ない感激の一瞬だっ
た。しばしばう然としている私

の成績が一番いので、ニュー
ヨークでも、ロンドンでも好き
なところをいい給え」瞬間、私
は「一体どこにしたものだろう
か」としゅんじゅんした。しか
し私の脳裏にひらめいたものは
華やかなニューヨークでも、ロ
ンドンでもなかった。そこには
おびたどしい小麦
の山積された小麦
の一大メッカ、北
米シヤトルの姿が
浮かび出てきたの
である。神戸商
を卒業するときか
らの念願「小麦問
題」と方の限り取
組みたいとの熱情
がうつぼつとして
に、支配人はこういった。「こ
わき出てきたのだ。
「世界一の小麦生産地である
外派遣させることにしたが、君
シヤトルにやって頂きたい」と

私はいった。瞬間、支配人は不
審気な顔付だったが、私の熱
情を聞くにおよんで「うむ、し
っかりやるんだな」と快諾。私
のシヤトル行きが決定した。
その当時、私の月給は十五円
也だったが、海外派遣の仕度金
として支給されたのがなんと六
百円也という大金。私にとって
は生れてこのかた握ったことも
ない大金だ。さっそく神戸元町
のナンバーワンといわれる「樂
田洋服店」に押しかけて「とに
かくアメリカに行くんだから、
とび切り上等の服を頼む」とい
うわけで、一着四十円もする背
広を春夏秋冬各一着と合計四着
注文、さらに「アメリカ行きの
船の中では晩飯の時にタキシ
ドを着るのがエチケットだ」と
いう先輩の言葉を信じて、五千
円のタキシードをも注文した。

卿士立志傳 落合豊一氏の巻

天職に生きる (9)

落合豊一

正木契村画



年若かったせいを中心に連日連夜、神戸のさかり場で飲み歩いてすました顔付で「メージャー」をやっていて、その当時、先輩の光景がいまもまざまざ思い出されて自ら微笑を禁じない。さらにこんどはカバン。大きなカバンに、中の一、二を手に握けといずれもリウとした本皮カバンをあつら



また靴も三足ばかり注文する。そして結局は仕事からも脱が、また金が十分余っている。落す。男子すべからず渡米するまで、女遊びをする必要も。た返す神戸駅の一隅に、いちよあ「と感したのが例のタキシードのせたまへ、船はやがて私にと

り」と力説するのだ。さて、その結果がどうなったかは想像にまかせるとして……とにかく私がいよいよ神戸駅を出て、横浜港から伏見丸(一万ト)船上の人々の夜、さかんを見送り……となった。初めて日本を離れて海外に渡航するといふ喜び、真実になに形も張っていないところ、私たちがただ興奮と感激で、新たな勇気に身体がうちふるえるのを覚えるようになった。た

た返す神戸駅の一隅に、いちよあ「と感したのが例のタキシードのせたまへ、船はやがて私にと

天職に生きる

(10)

落合豊一



当時、シヤトル

いまちょっと、女事務員たち

ル市は人口約卅万人、時あたかの横顔を紹介すると、ドイツも第一次世界大戦中のことで、系の「ランデック」は廿一歳。とりわけ諸物資の輸送上、極め五尺四寸ぐらいで、お世辞にも重要な地に当るだけに、その美人とはいえないが、氣立ては股盛ふりも相当なもの。各園の非常にいい。女事務員の中かで有名商社の出張所、支店が各自も最も仕事熱心で、どんなむつ押しに並んでいる。そのシヤトル、かしい仕事を与えても顔色一つルの港からほど近いファースト、空えず平然とやってくる。た、アブニニエーという街の一角、だし、日本語となると全然ダメ六階建のユルマンビルディングで、色気の方もサッパリ。そのの三階が鈴木商店の出張所だ。反対に色気たっぷりというのが所長は勝屋利秋氏、さらに所員には木村謙三、戸田正太郎両氏と、アメリカ人のエバンス、誘われたこともあったが、私が（ワシントン大生出身で、当時ダンスは全然だめというのを知って、以来あまり親しくはならなかった。のちに同じビルに

事務所があった日本郵船の若い出張員とちょっと関係が出来て

またカチカチのクリスチャンだった十八歳の「ヌーナン」嬢は、いずれも生粋のアメリカ人で、ともにちょっとした美人だった



シヤトルに着いた翌年の四月九日、所員ならびに同ビル内の連中らとうつす。前列左端がライス嬢、中列左から二人目が私、その隣リヌーナン嬢、さらに勝屋所長、ランデック嬢、エバンス、戸田氏の順。後列右から二人目ファース嬢。

しまったらしい。さらに受けにいて、給仕などの役割をしていた十七歳の「ファース」嬢、

一ドルは日本円に換算すると二百四くらいだが、生活は本当にツクなものだった。どんなにせいで、決して毎月百ドルは軽く残っていた。そこで、氣も大きくなりシヤトル市で二番目といわれる「フライホテル」にとり留としゃれこんだ。宿泊費毎日五ドルというんだから大したことあるまいと多少あまく見ていたんだが、……泊ったその晩からなんのことはない失敗の連続。掛布を一枚めくって、寝ることになっていのに、こいていねいに掛布をベッドに重ねた上から寝たり、朝は朝で、日本のみそ汁を飲むような調子でスープを注文して、ホテルのボーイに笑われたり、きんさん。やはり田舎者は田舎者らしく安宿に落着かないと、第一層がこつて仕方がないと、つくつく思った。

天職に生きる

(11)

落合豊一



フライ・ホテ

にしゃれこんだもの、結局

食費代その他がかさんで、滞

たので、始めの元氣はどこへ

ら、どうとう退却？その後は

の所員らとともに安アパート

の共同炊事におよんだ。

そして私が、学生時代からの

願であった「小麦」と正面切

て取組んだのは、この安アパ

トでの最初の一年が過ぎて翌

の十一月九日を迎えてから、

この日、第二次世界大戦の休

ソロソロ日本人街にくりこん

だ。そこは目抜き通りからちよ

っとながれたところだが、千戸

だ。そこは目抜き通りからちよ

っとながれたところだが、千戸

だ。そこは目抜き通りからちよ

だ。そこは目抜き通りからちよ

っとながれたところだが、千戸

だ。そこは目抜き通りからちよ

っとながれたところだが、千戸



部屋代は安かったが、なかなかどうして立派なアパートで、シヤトル駐在中、ほとんどのアパートで生活し、思い出も多い。

先づ先づはほのかに日本情

緒の香りがたどよんでいる。

先づ先づはほのかに日本情

興にのり始めてくる。

そうなる、私はうんざりだ。

ウォールフラワー(壁の花)とお

嬢さん方からアタ名される通り

全然踊れないからなのだ。と私

と同じように独り浮かぬ顔して

床柱にもたれてる男がいる。

なんとダンスが最もとくとい

われるアメリカ生れの二世、ス

タンフォード大学卒業の戸田君

ではないか。

『どうしたんだ、気分でも悪

いのか』と聞いても、ただ『ノ

』『ノー』と首を振るだけで

全く元気がない。こりゃ、どう

も様干がおかしい。日ごろ好感

をもっていた戸田君の素振りだ

けに私も気になってきた。それ

に、ダンスばかり興じて、私も

いささかこの場のフレイキから

逃れたいという気持もあったの

で、これをしおに、ムリヤリ彼

をうながして外に出た。

獅子立志傳 落合豊一氏の巻

天職に生きる

(12)

落合 豊一

正木 契村 画



淡い月光をあらうな荷物をつんで、雨にぬれなびながら、人通りのとれた日がら坂道をわして行く女性の姿本人街のさんたら坂まできたとき、突然戸田君が立ち止った。そして、私の手を握りしめながら「ミスターオチアイ、聞いてくれ」と泣き出さんばかりの表情だ。

話を聞いてみると、「こうだ。さんの看板娘で、なんと日本人ことしの春、シトシトと、雨の降り出した日暮れとき。戸田君が自炊用の味噌や、食器を買おうとしてこの坂まできたのを、夢、起きてはうつつ幻しの、うた。すると、自転車に山の上とどいた調子で、それはもう

夢中

ところがである。キクさんの両親は戸田君の出入りを余然歎

思案もない。

うなものだったのだ。

その場はとりあえず元気づけ

上もない。そのうえ、気短かですべて物事はデキバキ、ハッキリ決めないと気持が悪いという



迎しない。キクさんには商売の取引きに便宜を計ってくれるシヤトルー横濱の日本郵船の若い船員某氏をムコにと、早くから決めているというのである。綿々たる彼のナヤミとはこのよ

本の流れをくみ、固いことこの

結婚するか、さもなくばハ

ツキリ別れるかというわけだ。さうして『浜田屋』のおやじさんを事務所に呼びつけた。そして『うちの戸田君と、キクさんを結婚させる』と一方的に切り出したのだ。ところが『浜田屋』さんもなかなか固で、『キクにはもうムコがきまっています』ときた。『サア大突、勝屋所長、オレの顔をつぶしたとばかり、』とめえのと

この娘なんか、金輪際もちうものか、ほかにも女はあるワ

調でまくして、とうとう談判は決裂してしました。

天職に生きる

(14)

落合豊一



シヤトル市周をしないでいものやると、ど
 辺の「ゴルフ」場は、そのころにタマがとぶか、見当もつか
 排日的な空気がほとんど全部す、危いこと、他人に迷惑のか
 が日本人の出入を禁止していかること、この上もない。何こ
 た。そこで、われわれは日本人とによらずやり出したら人に負
 の借用を許可しているシヤトルけるのがきらいな私はそこで一
 市に、たゞ一つの市區「ゴルフ」計を考え出した。

「そうだ。みんなが来ない間
 フ」場に日参するよりほかにみ
 ちがなかつた。だが、われわれに練習しよう」というわけで、
 はそんなことには一切構いなそれから毎日、午前四時ころ
 く、せつせと通いつつけた。とまだうす暗いうちに寢床をはい
 ころがとばかりに、日本人が
 出て、目をこすりながら、「ゴ
 ルフ」場に通い出した。なるほ
 ど、これならだれも人は来てな
 なかなか順番が回ってこない、
 たまに順番がやってきて私の
 ように全然手厚さのレッスンを練習することが出来た。しか

だ。私はわが意を得たりとばかり、ものの五ヶ月ぐらいいも通いつつたか。「ゴルフ」シーズンも終ろうとする九月中ごろ、所屬や同じビル内の腕自慢らうに、大きくバック・スイングして、タマを打つと違つて、



背負投げの腰のヒネリで、見事一等をかちえた当時の私の「ゴルフ」スタイル。まさに得意満面といふところ。

私の得意道で習いおぼえた「背負投げ」の腰のひねりの要領だ。ところが、寮外この要領で打つと、ハーフ・スイングにもかかわらずタマが遠方まで飛ぶの

中「あいつ、いつの間か練習しておったか」とくやしがること。私はその当時の痛快さが忘れ得ず、いまに至るもヒマと余裕がえあれば阪神近郊の「ゴルフ」に通うというありさまで、一かどの「ゴルフ」狂」になつてしまつたようだ。

「ゴルフ」シーズンも終り、十月に入ると、うとうしい雨季がやってくる。ほとんど連日のようにジメジメした雨の連続だ。そのころになると、われわれは日曜日の慰安のしようがなくなる。

そんな退屈な日々がつつたある日、突然、同じビル内にいた川崎造船所の出張員、山田一郎氏から「どうだ。一つ、端唄か、小唄でも習ったら……。」との誘いのコトバをうけた。

◇

◇

天職に生きる

(15)

落合豊一



山田一郎 ばあちゃんだ。なんでも昔は東氏は神戸高商出身で私より五年京の深川芸者とかで、男に捨て先聲、ところがこの先聲、なかなかの粋人で、自分で三味線をひくというほどの通。

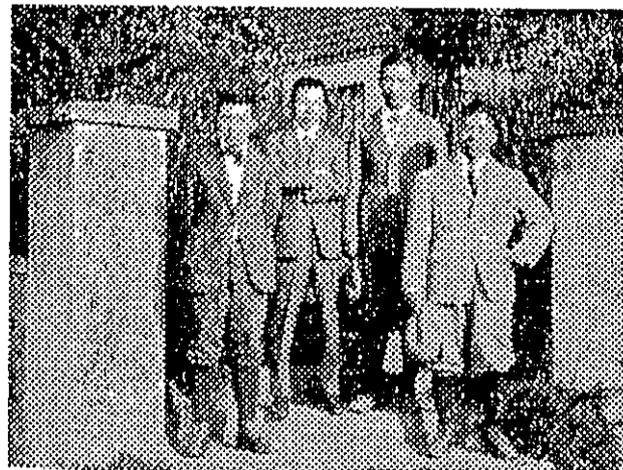
私は山田氏と、さらに私より一年遅れてシヤトルに赴任して来た後輩の島崎隆雄君と三人で唄の練習を始めた。毎日仕事を終ると、三人つれだつて日本人街の方に出かける。そこのある居酒屋で、ドロクを一杯ひ

っかけ、ほろ酔い機嫌のまま日本人街の唄のお師匠さんを訪れるというくんだりになる。

このお師匠さん「清元雅栄」といってもう六十くらいのお

に始まって、「梅にも春」春雨「など」と、出ないカスレ声

ったが、それでも大体の唄の文句くらいは覚えられ、下手なりにも歌ったあとのそう快きはななさい」との話があり、下手くそ同士どうせやるならうんと大作をとよせばいいのに、私が清元の「保名」で、島崎君が常磐津の「将門」と大見栄切ってしまった。



日曜日の朝、さてこれからどこへ行こうかとアパートの前に勢ぞろいしたところ。向って右端が私で、左端はエバンス氏、左から二人目は戸田君

をむりに張り上げて精進におよんだ。

そこで、私は島崎君と、新米の弟子入りよろしく「秋の夜」

また一杯引っかけるとドロクの味もまた格別だった。

私ら、一向に上手にはならなから、一回に上手にはならなから、

さて、いよいよその当日は、私ら三人はまず元気づけにドロクをと、例の日本人街で飲み出した。最初のうちは一杯だけと思っていたのに、飲むほどに興が出てきて、とうとうへべれけ。私たちは借りものの紋付き、角帯をせわし気に着込んで、あわてよタクシーを拾い、会場である「日本人会館」へとくり込んだ。会場はもうギッシリと満員、新婚早々の戸田君とキミ子さん夫婦も来ているはずだ。

天職に生きる

(16)

落合 豊一

正木 契 村 画



待ちかねたよ
うなつてくれたのだから世話は
うに、お師匠さんが「さあー早
ない。だが、私たちは冷汗タラ
く、あなたたちの出番よ」とう
ながす。

観客席からは割れるような拍
手がわきよる。だが、私も島崎
君も酔眼ももうろとして、サ
ッパリため。独りでうならねば
ならぬのに文句が一つも出てこ
ない。「ミスター落合」戸田君
とこのことでアパートに帰ってみ
ると、女中さんが「お客さんが
待っていますよ」という。

「おれだるう？」私が部屋に
入ると、一人の巨漢がヌーと現
われた。

「オー、ソウ(象)君じゃない
か」私は驚いた。徳商時代の大
の仲好して、ともに神戸商高を
受験したが、彼だけは惜しくも
入学したのだが、三月もたたぬ

だ「久しぶりの再会に、二人は
夜もすがら語り合った。

学費ぐらいはなんとかしてやろ
う」



不合格、以来慶応大学に進んだ
という事は知っていたのだ
が、いま、こんなところで会お
うとは……

「驚いたなあーどうしたん
するな、大したことは出来ぬが

私はハッキリ約束した。そし
てそれから後も私は毎月百ドル
ずつの学費を送ることを忘れな
かった。私の給料は毎月二百下
ルぐらいだったが、百ドルもあ
れば毎月ラクにくらせていたの
で、残りの百ドルを彼に送って
もそう生活には困らなかつた。
彼の喜びは想像以上だった。こ
れは後日の話になるわけだが、
結局私は三年間、彼の学費を送
りつけ、卒業後も私の取引上
で知っていたポートランド市の
中田商会(徳島県の出身者で木
材問屋)に就職をあっせんした。
現在、ソウ君はロスアンゼルス
で、相当手広く木材業を営んで
おり、折につけ、私に手紙をく
れたり、珍品を送ってくれたり
して、そのたびにいつも私はう
たた懐旧の念にかられるのだ。

天職に生きる

(17)

落合豊一



シヤトル時代

私は、仕事のないときは、ゴルフ、小唄、端唄などで英気を養ったのだが、さて仕事となると、私は死物狂い。いつも小委取引所の相場とにらめっこしながら鋭いカンのあけくれを送っていた。こんなとき、一番困るのが外人相手で取引上、口論のとき。

普通の会話なら、どうにか意味だけ通じるようにはなっていたが、さてケンカとなると相手に負けないとするはずりばかりが先きにたつて、思うように



鈴木商店シヤトル出張所の内部 右が私
で各商社への引合い書類をしたためている
ところ、左側には戸田君が座っていた。

いし、自分の胸の中もストとしいし、大抵の外人さん、しま

こういつた日本とアメリカと
いうような国籍の違ふもの同士
の商取引をけん、コトバ上のけ

ことはい
つちゅうの
こと。とこ
ろが、これ
が商売上の
契約とか、
取引上は手
違いがでて
くると、こ
れは大変
で、とんで
もない失敗
をやらかす

失態をやらかし、一時は本當に
腹でもかき切っておわびしよう
かと真剣に考えたほどのことが
ある。

と云うのは……

ちょうど、勝原所長が本國に
出張してルスのとときであった。
當時は世界大戦の影響をうけ
て極度に鉄が不足していた時分
だ。なにしろ造船しようとして
も鉄がないのでどうしようもな
い。それこそたれも彼もノミと
り眼(まなこ)で必死に鉄をあ
ぎっていた。もちろん各國とも
いずれも鉄の輸出は禁止して
いる。

私は小妻部門を担当していた
が、同時にそういう情勢下だっ
ただけに鉄関係についても担当
を命ぜられ、たえず鉄の買付け
についても眼を光らせていた。

いには眼をパチクリ、こちりの
怒声に押されてしんぞもどきだ
なってくるのがオチだった。

二年目のこと、とんでもない大

私にシヤトルに赴任してから

天職に生きる

(18)



落合 豊一
正木 契 村 画

そんなある日、突然カナダの
一商社から「鉄の売物約二万ト
ンがあるが、どうか」という引合
いが届いてきた。

すぐにでも飛びつきたいのは
山々だったが、私は慎重に構
えた。

そして、すぐさま分析表その
他の資料を折返し取り寄せ、十
分検討しつくした。だが、あ
ゆる角度から調べてみても一
分、降ってわいたような良い話
非の打ちどころもない。「よ
し、これなら絶対大丈夫だ」私
は自信を持てた。同時に本社に
対しても、指図を待つ旨の至意
電報を打った。ところが、当
時の電報にはやたらと検閲時間
ばかりが長くかゝって、かんじ
んの返信をうけるまでには往復
の返信をうけるまでには往復

鉄關係を兼任しているとはい
え、あまり深くは専門知識もな
かったが、とにかく鉄不足の時
分、降ってわいたような良い話
だ。「こんな巧い話はまたと
ない。絶好のチャンスだ」とは
かり、裏のところ、私だけでな
く所員のだれもがこぼりする
ほど喜んだものだった。

「だが、待てよ。手放して喜
ぶのはまだ早い」

十日間以上もかゝるといふあり
さま。そのうち、カナダの商社
からは「とにかく早く取引を
代金の信用状を組んだことのみ
は決心した。たゞ、先方の強硬
態度からやむなく契約と同時に
物があるかと願うと氣になつて
夜もなかなか寝つけない。なに
しる鈴木商店に入社して以来、
初めて自分だけの責任で取組ん
だ一世一代の大仕事だっただけ
に、私も必死だ。一口に二万ト
ンといっても五十ト積み車の前だ
と、延々四百両にもおよぶほう
大なものだ。私にとっては血の
出るような三日間がつよいだ。
三日目の朝、まだ寢床にあった
私の耳許に、突然戸田君のす
とん狂な声が響いてきた。



めくれなさいと、どうしても待
てない。ほかに手放すかもしれ
ない」と、矢のようにせかして
くる。こうなつてはもう本社は
らの返信など待っておれない。
カナダに送り、すべての契約上

の手續きも終った。矢はずでに
弦をはなれたのだ。あとほもう
現物がシヤトルに着けば万難終
りとなる。だが、私はどんな品
物がくるかと願うと氣になつて
夜もなかなか寝つけない。なに
しる鈴木商店に入社して以来、
初めて自分だけの責任で取組ん
だ一世一代の大仕事だっただけ
に、私も必死だ。一口に二万ト
ンといっても五十ト積み車の前だ
と、延々四百両にもおよぶほう
大なものだ。私にとっては血の
出るような三日間がつよいだ。
三日目の朝、まだ寢床にあった
私の耳許に、突然戸田君のす
とん狂な声が響いてきた。
「落合さん、汽車が着きまし
たよー」
私はがはと、はね起きた。そ
のまま転げるように、シヤトル
・ステーションにかけ込んだも
のである。

天職に生きる (19)

落合豊一

正木 契 村画



延々長々、四私には判らなかつた。とてもち
 百面の貨物列車がしましもシヤ
 トル駅に着いたばかり。私は真
 一文字に貨車にとび移つて、む
 をほるよつに鉄片を拾ひ上げ
 だ。どうもなごうだ。私が想像し
 ていた鉄とはまるっきり違ふ。
 鉄は鉄でも、たゞ鉄と名がつく
 だけ。クス鉄をたたくつげ合
 わしただけのことではないか。
 手にとつてみると、バラバラ崩
 れるよつにこわれてしまふ。

「しまったー」私はへなへな
 とその場に座りこんでしまつ
 た。目の前が真暗だ。何故こん
 な大きな手遣いが出来たのか、

私は判らなかつた。とてもち
 よつとやそつとの弁償ではこと
 すまない。私の一生も終りだ。
 そうだー死んでおわびしよう。
 私は真剣に死とうことを考え
 た。もうどうにもならぬ瀬戸際
 に立たされたのだ。

顔面そう白となり、私はいつ
 までも鉄クスの中にうすくま
 ていた。瞬間、祖母の隣襟深い
 眼差し、両親のさびしそうな
 顔、顔がぐるぐるを去来してく
 る。

そのとき、ドンと背中をたた
 かれ、ハッと気づいた。
 戸田君に島崎君、それにミス

ていなくて逃遁するなんて男の
 することか。なんとか打つ手は
 ある」私は三人の友情に本當に
 泣けてきた。「有難う、有難う
 かりして下さる。私たまたも
 ・・・」私は彼等の手をしつかと



だ」と大声で叫んだ。みると、
 Xパーセントを超えざる (not
 more than X%) とはっか
 り早合点していたのに、なんと
 「not less than X%」
 (Xパーセントより少く) とな
 っているではないか。

「なるほど、何故ここに今日
 まで気がつかなかったか」と、
 じんだ踏んだが、もうあとの
 祭り。

結局、鉄不足の折とて、なに
 がなんでも手に入れずんばと、
 盲目的にとびついた結果が、こ
 のザマとなつたわけだ。だが、
 この結末は案ずるより生むが易
 して、察外手取り早く解決出来
 た。なぜならシカゴの商社がし

責任があります。なんとか良い
 方法を考へてみましよう」と、
 手をとらへばかりに訴えている
 のだ。
 「そうだ。死ぬなんて考へた
 オレはバカだ。まだ責任も果し
 析表の二カ所を押えて」

握りしめたのである。
 事務所に帰つて、もう一度シ
 カゴから送つてきた分析表を調
 べてみた。どこにもおかしいと
 ころはない。・・・、戸田君が分
 析表の二カ所を押えて」

たように、同じような方法で、
 分析表をつけて売りに出すと同
 時に、ニューヨークの二商社も
 また私と同じように眼の色かえ
 てとびついてきたからだ。

天職に生きる

(20)

落合豊一

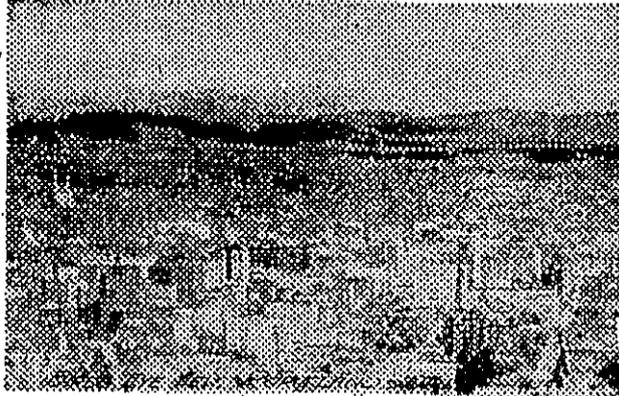


大正九年の市「ポートランド」に出張所を
春、出張所長が日本の本社に転
移した。

勤したあとをうけて、思いもか
けず、若輩の私がシヤトル出
張所の長に就いた。当時満廿
五歳になったばかりで、これに
はいささか驚いたが、本社では
とにかく小麦の取引高を一層増
加せよとの託宣なのだ。私は
新たな勇氣であらいたづ思いた
った。

まず、私はシヤトル市よりさ
らに、小麦および木材など重要
物資集散の大きな都市に出張所
の主力を移すべしとの見解か
ら、開港にオレゴン州第一の都
市、

上流のツシントン州、アイダ
ホ州、オレゴン州各地域で産出
される大量の小麦がこの街に集



「ローズ・シティ」とも呼ばれる美しい
ポートランド市の全景。出張所はずっと
左端の方にあった。

大河コロンビア川の流域にはい
たるどころ、製材所があつて國
内および輸出向の売買の中核を
なしていた。
いわば小麦および木材關係の
取引にはもつ
てこの地理
的条件を備え
ているのだ。
だが、こゝ
で考えねばな
らぬ問題があ
る。それは商
売に勝つため
には他の会社
と同じような
やり方ではタ
メ。つねに一
歩さきんする
積込みを待つて停泊しているの
もつと進歩したすぐれた取引上
の技術がありはしないか、再検
討しよめる必要が大いにあると
考えた。同時にあらゆる角度か
ら研究をしつづけたのである。

の主流、百十に位置し、別名
を「ローズ・シティ」ともいわ
れるほど街中至るところに、パ
ラの花が咲きみだれ、本當に美
しい街。山はなく、人口は当時
廿五、六万といふであつた。
荷され、大製粉会社で豊富な小
麦粉が製造されていく。またポ
ートランド市の中央部をよぎる

そこが、習慣といふものは
恐いものである。長年同じ
がちで、なかなか現状から脱皮
することがむずかしい。
そんな目がつづいたある朝、
私はふとコロンビア川の方に
向いてみる氣になつた。そこ
は鈴木商店が代理店に指定され
ている国際汽船のK号が小麦の
積込みを待つて停泊しているの
である。

してもふみなどころがないか、

天職に生きる (21)

落合豊二

正木契 村画



国際汽船のK 車のうしろあたりからバラバラは折から小麦の積込みに大わらわの態だった。

威勢のいふ沖仲士がつきから一袋へと小麦をつめた大きな袋を手押し車にのせて、せっせと

先に積みこんでいる。私はふと年時代、家の商売で米袋をか

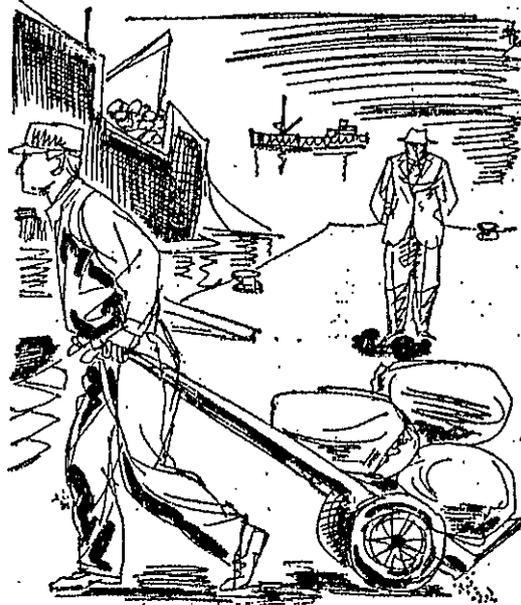
いていたことを思い出してきこるとおなじかしい気にもな

る。……

とるが、ふと気がついてみる船に積込んでいるその手押し

「なるほど」瞬間、私は自分ながらうかつなことをいっ

全部、新しい袋を使用せず、すてに一回か、二回使ったことのある「ニアキ」「ニアキ」の古袋を使用するのが普通とな



ていたのだ。

小麦が船積

みの際こぼれ

落ちるのも当

然とい

うわけなのだ

その場はど

た。あんな調子では恐らく日本に着いたときも同じことだろう。わずかなことだと思っているだろうが、これが何万トン、何十万トンにでもなれば何う大なものになってくる。そうでなくとも船賃は高いし、なんとか、いい方法はないものだろうか。私は真剣に考えてみた。本社にも問合せてみたが、その小麦のこぼれる量がなんと全体の五割にもなっているという。五割といえは一万トンで五百トン、十万トンにでもなれば五千トンにもなっているではないか。

のたと願った。うせ、船積みの仲仕たちになせなら、当時、小麦の積出したところで手手があぐわいでもした用いる袋は、どの会社でも経費の点から考えて、全部が

「これではいけない。こゝに小麦の取引を、さらに検討する必要があるではないか」私はそさし心の中でいい聞か

天職に生きる

(22)

落合豊一



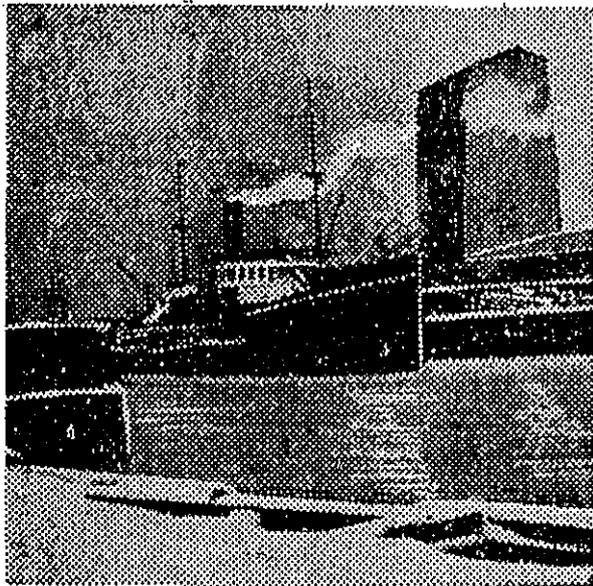
小麦のこぼれ
 『あーなんとかならないもの
 のを無くするために、まず最
 初に浮かんでくるのが、なにも
 『ニアキ』や『ニアキ』の古い
 袋を使わなくても、新しい袋を
 使えばいいのではないかといい
 と。だが、これはダメ。第一新
 しい袋だと古い袋とほくらべも
 のにならぬくらい費用がかさん
 で、これでは荷造り費用がふえ
 る一方、この会社もこんなバ
 カけた方法はやっていない。』

少年のころから、一粒の米
 の大切さが身に試みているだけ
 に、たとえ小麦にしても、大切
 な食糧には変りない。あややお
 るそかな気にはなれなかつた。

『あーなんとかならないもの
 たろうか』一つのことだが、気
 なり出すと、なんとか解決しな
 いとどうしても気がすまない。
 頭の中にはこのことばかりが
 こびりついてた。

事務所の窓からなんとかなし
 に外を見やると、うすぼんやり
 とキリに包まれたコロンビア川
 が見えている。その川の流れる
 沿った河岸には所せましとはか
 りに、小麦倉庫が立ち並んでい
 る。世界各国の有名商社が建

てくるではないか。
 私はずっとわねに返つた
 『そうだ。小麦のバラ積み。こ
 れだー』私はよびよるようじし
 えている。この倉庫は二、三年



ポートランドから日本向けに出港する小麦貨物船

『あーなんとかならないもの
 か全然ない小麦そのものばかり
 のバラ積みだ。』マフタに浮かん
 ず一目散にコロンビア川の方

て大声で叫んだ。
 ひっくりしたような所買たち
 の素振りを感じながら、
 私はそのまゝあとを振り返りもせ
 ずに一目散にコロンビア川の方

前、ポートランド市が百万ドル
 の経費をかけて建築した近代的
 なエレベーター倉庫な
 のだ。私は無理矢理、談じこ
 み、とうとうこの倉庫の一部を
 鈴木商店用として借りることを
 承諾させた。そしてバラの小麦
 をそこにキッシリ保管させるこ
 とになったのである。

やがて、最初のバラ積み小麦
 二千斤がポートランドから横浜
 港向け積出された。その結果が
 どうでくるか、なにしろ初め
 ての試みだけにちょっと気にな
 ったが、結果は上々、麻袋もい
 らぬし、そのうえ、こぼれも
 ない。まさに一石二鳥の妙案？
 というわけで、本社からも賞
 めのコトバもいたたくし、大い
 に面目をほどこしたというわ
 けた。

天職に生きる (23)

落合豊一

正木 契村 画



小麦のバラ積 もまことにすまじい。個人対個人では絶対に勝ち目はない。だが、私はこれだけで満足だ。そしてユダヤ人については出来なかった。

中国語は世界のヒノキ舞台 又帝王が変り、そのたびに個人を思う存分小麦取引の腕を振ってみたい。

そのころ、世界をまたにかけた。その結果、身を守るために小麦取引の舞台では、まずなは金銭以外にたよる何物もなく。といつてもユダヤ人の活躍がなってきたのである。



が、われわれには固結の力がある。海外に派遣された出張員たちが打って一丸となって彼らに

は万一失敗することだでもなれば、単に自分だけとか、鈴木商社だけの責任ではすまされなくなってくる。國家に大きな損害をかかせることだもなってくる。

では絶対ダメだということを知った。

世界のヒノキ舞台にはシカゴをおいてほかにはない。

そこには世界一の規模と權威を誇るシカゴ穀物取引所が威然としてひがえていたのである。

なにしろ当時の日本の小麦生産高が年額百万トであったのに、シカゴ取引所ではなんと、たった一日の取引だけで僅に四、五千万トはあったというのだからその規模の大きさが想像されようというものだ。

まず、このシカゴ取引所になんとしても入会しなければならぬ。ところが、そう簡単には入会出来なかった。入会するには三社以上の會員の紹介

とともた、取引所の選考審査会をパスしなければならぬのだ。

フチ当りなのだ。

この場合にしか、おおよそ勝負はなかつた。しかし、私には勝算十分なるとの確信をもえていた。

それだけに私も慎重なことを選んでいた。それとともた私はまず、世界の舞台に進出するには単にボートランドをば頼っていたの

國際貿易を開始するに當って

然群を抜いていた。彼らには家がない。そして、たよれるのは自分だけ。それだけに金引の地位を引き上げようと、躍りになった。

ユダヤ人、中国人に対抗する彼らの世界舞台における行動には個人では絶対だめだ。だ

天職に生きる

(24)

落合豊一



シカゴ取引所 といわなかったが、結局商売に入会するため、私はあらゆるカタキはすなわちフレンドでは方法を講じた。ところがなかなかないか」という私のコトバにユカ思ふようにいかなかった。そタヤ人はニコリ笑った。やがのうちフレンドに呼んだことがあった。

ぞうだ。商売カタキというものは、一面商売上の友達ということにも相違する。いっそ、小麦取引の一流商社に頼んだほうが、大きな度量から紹介の手ハズをとってくれるかも知れない」と……。

私は強引に、当時世界で、五指の中に数えられていたユタヤ商社のY社とU社に頼みこんだ。初めのうちにはなかなかウ

シカゴ取引所に入会出来

た。大正九年十月十日のことであった。もちろん日本人としては初めてのことで、そして、その後鈴木商店以外のだれもが、このシカゴ取引所には入会出来なかつた。

シカゴ取引所の正会員となつて、私は勇氣百倍。これまで日本向けのみに小麦を買入れていたのが、その後は日本はもとより、上海向けさらに印度方面か

らばはイギリスを中心とするヨーロッパ向けにまで小麦取引



米太平洋沿岸一帯にはオレゴン松が無数に林立していた

らばはイギリスを中心とするヨーロッパ向けにまで小麦取引

にひきかえ、小麦につく第二の世界的名産としてアメリカが誇りうる「米材」の取引はどうであつたか。残念ながら当時、まことに寒い状態は一年中を通じて全然止まるで、正直ところを知らない。真直ぐ上へ、上へとダンダン伸びるばかりなのである。この付近一帯におびただしく生長するのが、米材を代表する「オレゴン松」であつた。

私はこの「オレゴン松」の取引に全力を傾注した。そして、その第一歩としてまず、米材輸出会社のバックスター社長ならびに太平洋沿岸米材輸出会社のフィールライト社長両氏の獲得に積極的になり出した。彼らはこの方面のボスであつたからである。

の手をのびし、この小麦に関し材であるとして、そのころから積極的な行動を開始した。ワシントン州からオレゴン州、さらにカリフォルニア州につづくアメリカ太平洋沿岸一帯

追隨を許さず、世界のビッグ・フォアーの域にまで到達した。小麦取引の隆々たる發展あり

天職に生きる

(26)

落合豊一

正木契村画



アメリカ合衆国としては、なにも好んで遠くアラスカの木材まで引き入れる必要はない。

八月とはいえ、さすがは北辺

そんなことしなくても、手近な太平洋沿岸地区にワンサと木材があり余っているのだ。だが、シーンとキリでつゝかれが、日本の場合はちがう。地理的にみても北半球沿いに、北海道からだと手が届きそうなのにアラスカがひかえている。

まさしく経済的には日本の勢力範囲内にある。将来はよろしくこの線にのびるべきである。私はそう信ずると、もう矢も

く、自然の偉大な力の前に身がしびれるような思いだった。

ボートランドを出発してから



十日、私はアラスカの北部の要衝「ノーム」市に着いていた。「ノーム」市から南方の「コルドバ」市につづく海岸線一帶は無尽蔵な森林地帯なのだ。

それとともに、付近一帯から秘金がとれるというので「ゴールド・ブーム」をあてこんだ一か

く千金組が、そぞろマチにく

そして「貴方はゴールド組じゃなきょうですか、一体なんの用件でこんな北辺くだりまでやってきたんですか」と、いかに

もけんそうな顔付きた。

私が一部始終を話すと、なるほどといった風に大きくうなずいたが、クルリと向き直ると、いきなり私の顔をまじまじ見つめながら「私はドクターですが、一体なんの医者が判りますか」という。

少し酔っているのかな、と思

いながらも私は内科、小児科に始まって外科、歯科など…順番に聞いてみたが、彼が答えるのはいずれも「ノー」の返事ばかり。

郷土立志傳

落合豊一氏の巻

天職に生きる

(27)

落合豊一



「一体なんの 医者のなか」私はたにか、から かわれているように、少々腹立 たしくなってきた。

だが、これは私の負けだ。廿 のトビにゃないが、いくら聞 いてみても當日、彼の専門は判 らない。どうしよう私も、参っ た。と書き上げざるをえなくな った。

そして、おもむきに彼氏はい った「なにもそんな部門の病氣 はかりなおすのが、医者とは 限らない。そんなことよりも 人生には大きな問題がある。



私がアメリカを去る一年前、 篠原正次氏がヨーロッパ視 察を終え、ポートランドにや ってきた。◎は私

際のお抱え医者で、専門はただ 夫婦間の性調和をはかるだけ。 そのほかのことには一切ノー・ タッチ。もっぱら理療的な夫婦 生活を営んで、毎日のごくア

の地で妙なところで下ギモを抜 かれたというしだいだった。

三週間にわたるアラスカ旅行

で、私は大いに昇脚をひるめ、 絶対にこの奮源を日本のため 活用しなければワソだと痛感し た。同時に、アラスカの木材に

大なる希

望と夢を託

しながら、

胸ぐらむ

思いでポー

トランドに

帰ってきた

のである。

ところが

私を待って

いたものは、突然の本社転勤命 令だった。 この年、本社では穀類部の強 化充実を図り、部長に満州部に いた篠原正次氏を抜きて、私は

篠原氏の推せんで、思いもかけ ず穀類課長のイスが与えられた のである。

アラカスの木材に後髪をひか れる思いだったが、本社命令と あれば致し方ない。

私は本社の穀類部で、世界市 場相手に存分戦えるという新し い意欲に心をしめなおして、や がて帰国の途についた。

大正十一年八月はじめのこと であつた。

思えば足かば六年間におよぶ アメリカ生活「苦しかったこと、 楽しかったこと、をまざまま ながながと頭の中をかきかき、

だが、私は少々の悔もなかつ た。あるものはつねに穀類を戻 しつつあったという喜びだけだ った。

卿士立志傳

落合豊一氏の巻

天職に生きる

(28)



落合豊一

本社の穀類課長 したが、同時に私らが担当して
として一年余り。その間、友人 いた小麦の商取引の上にも軍大
の仲介で結婚生活にもいり、新 なリゴを来すオソレが生じて
しい人生に第一歩をフミ出して きた。

いたわけだが、ある日のこと、 というのは、これよりさき、
そろそろひる飯どきになるうか 穀類部ではアメリカを中心とし
という頃あい。 て世界的に小麦の大暴落がある
突然、グラ、グラときた。 との見方をとり、九、十、十一、
地獄だ！ 十二月までに積出しするといふ

このとき、大正十二年九月一 条件で米太平洋沿岸地区から新
日、関東大震災が起ったのであ 小麦廿数万トンのカラ商いをな
る。やがて「東京全滅」といふ し、関東周辺の製粉会社にいち
ニュースまで飛んで、まさに名 早くカラ売りの悪感をしていた
状しがたい大混乱ぶりだった。 のである。そして、まもなく小
鈴木商店でもときを移さず、 麦相場はドン、ドン下落を開
救援物資の輸送などに万全を期 始、われわれはきてこそ予想的

中とばかり、独りぼくそ笑んで
いたワケ。
その矢先きに突然、関東大地

震が起ったのである。果して小

つくようなシミツクをうけた。
すぐさま、緊急会議が開か
れ、とりあえず私が買手の製粉
会社の実情を調査することにな
った。

できたのはよかったが、それか
ら先きがいけない。線路決壊で
どうしても行けないという。私
もあらかじめ不測の事態を考慮
していたが、これには弱った。



鈴木商店の穀類課長として勤務中にう
つしたものの。右から妻武子、長男力、
私、次男祐の順。

列車が開通するまで、とて
もじゃないが、待てない。
どんなことがあっても、一
刻でも早く東京に到着しな
ければならない。

私は野良犬のように、清
水のマチをあちこちさまよ
った。すると、その晩、清
水港から東京向けに緊急の
救援物資をつんで立花丸と
いう小型船が出帆するとい
う耳よりなニュースをキャ
ンチした。「これだ！」私
はおどりました。ところが、
その夜は二十十日の余波を
うけて、大暴雨だったのであ
る。

屋が起ったのである。果して小
麦買手の製粉会社は大丈夫だろ
うか、被害のていどは？ ケン
コンニてきの大勝負を夢見てい
ただけに、瞬間、背スジが凍り
とろろが、東海道は清水港ま

天職に生きる (29)

落合豊一

正木契村画



名にしおろ遠 船が大きく傾斜すると、ザーンと
州離の荒波に向って、わずかに二
白、そこそこの立花丸は出落
した。

乗りこんだ連中はギリギリの
せっぱつまった用件を背負った
ものはかり。みんな決死の覚
悟だ。

やがて、風雨はますます激し
くなるばかり、船は右、左には
ひしく揺れる。もう船酔いとか
いふ生やさしいものではない。

暗くなものもなく、ま
ったのだ。あざむき見てもこ
ちを見て、みんな死んだよう
にグッタリしている。そのとき、
またゆだねるはかない。

すると、不慮な力が体内か
らわき上ってきた。なんの不安
もオソシもなくなくなったので

ほおきながら、ハッと気づく
と、もうしらびらと夜はあけて
いる。不慮に風も、雨もヒタ
リと止んでいるではないか。
助かったのだ。

私は気がでない。果してお
とくい先の製粉会社はどうなっ
ただろうか？ 焼跡にしょんぼ
りたらずむ人、救済物資の運搬
にこた返す人波をかきわける
ようにして、つきつきて、製粉
会社を見て回ったが、幸いなる
かな、ほとんど被害らしい被害
はない。少々の修復を加えれば
日ならずして、もとの運転が開
始されそうである。



ある。

同時にけいけい睡魔に襲わ
れ、そのまま死んだように意識
を失ってしまった……。

それから何時間くらいた
てたか。ヒヤリとする風に

瞬間、私はひきよけてくる音
ひきよけることまできなが
った。
ようやくのことで、東京に着
いてみると、驚いた。あたり一
面の焼野原で、想像以上の大惨

そのうえ、政府が震災にもと
づく緊急閣議で、小麦の輸入
税を免除することを発令したた
め、従来以上に各製粉会社では
小麦の買いつけに積極的になっ
ているではないか。全く夢のよ
うななりゆきである。使命は終
った！私は予想外の吉報を胸に
たたんで、勇躍、本社に引き返
したのである。

天職に生きる

(30)

落合豊一

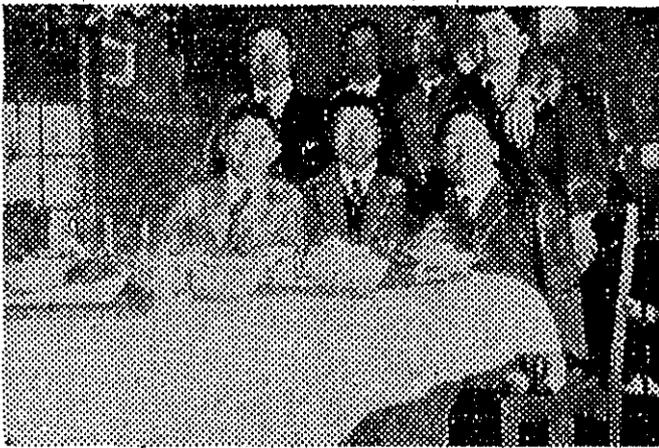


製粉会社との小

関東大震災が突発して、二週

麦売買の話は万幸順調にいっ
 間ばかりのちのことである。ポ
 だが、問題はアメリカ側産地の
 ートランドといえは、私にとっ
 出方である。奥のころ廿数万
 ては第二のふるさとでもいう
 べきなつかしい土地である。た
 然買つけてなかったのである。
 が、こんどの場合はそんな感傷
 的なのトリなんかないギリギリ
 しかも相場はドンドン下る一
 の立場に立たされているのだ。
 方、最初六十噸が一ドル卅セン
 トであったのが、とうとう一ド
 ルを割るといふありさまで、こ
 れには産地側が売り惜しみる
 のも、至極もつともなはなし。
 べくに買いつければ、相場が一
 いくら待てども一向にポートラ
 ンド、シヤトルの積出し港に荷
 が集ってこない。とうとう、し
 びれを切らした本社では急ぎ私
 をアメリカに派遣させた。

間ばかりのちのことである。ポ
 ートランドといえは、私にとっ
 ては第二のふるさとでもいう
 べきなつかしい土地である。た
 が、こんどの場合はそんな感傷
 的なのトリなんかないギリギリ
 の立場に立たされているのだ。
 ポートランドに到着して、ま
 す考えた。問題の廿数万トをど
 のようにして買いつけるか。一
 等にハネ上るのは必定だ。
 私はポートランドにおける在
 庫小麦屋や、その他の事情を考
 慮して、まず五万ト分だけ、日
 本向け第一便として積出しする



私が小麦の買いつけで、再度ポートランドに
 寄ったとき、出張所員たちが普をしのんで歡
 迎会を開いてくれた。右端に座っているのが
 私、そのうしろに立っているのが島崎君

の早い船がなかなか見つから
 ない。やっとのことで、サンフ
 ランシスコの某製糖会社の船を
 つかえてとうにも自由がきかな
 くなるというのだ。だが、私は海
 軍小吏を替えようなどという

やとい入れたのだが、なんとこ
 の船、一万四千トもあるという
 超巨大船。ちなみにコロンビア
 河上流百十噸にあるポートラ
 ンド港にはいままでかつて九千ト
 以上

余裕を持ち合せていなかった。
 あるものはただ、一刻も早く日
 本に向け船積みするということ
 ばかり。
 『エーイ、ままよ。なるよう
 にしかならない』

にしかならない』

私はむりやりでも、一万四千
 ト級の船をこのポートランド港
 に入港させようとして、折から
 コロンビア河口を五十噸ばか
 り入ったところに、停泊中だっ
 た貨物船に、単身のりこんでい
 った。

『スピードを落してでも、な
 んとかコロンビア河を抜けられ
 んものだろうか』

私は必死になって船長をくど
 きにかかった。だが、六尺疊
 か、ヒゲだらけの船長はただ
 『ノー』『ノー』とかぶりを振
 るばかり。しまいに真赤な顔
 をして怒り出した。

天職に生きる

(31)

落合豊一

正木契村画



「小麦をそんなに満載してこのコロンビア河が抜けるか」
もうんとはすもうではないか」

「わしらの身体がどうなつて
……と必死。
すると、ヒゲだらけの船長が
少し顔色を和らげて、
少入港するか、しないかは別
問題として、もう一度だけ、ポ
ートランドの港付近をしらべて
見よう」といひ出した……。こ
のコトバはまさに、私にとつて
は渡りに船。すぐさま船長と、
その他のおもたつた船員たちを
つれて、貨物船から、ランチで
ポートランド、棧橋に向つた。
ポートランドに到着すると、

「しまいには船長だけでなく、
そばで聞いていた船員たちまで
が血相變えてシリシリつめ寄つ
てきた。
「かんじんのポートランド入
いからた。すぐ船長らにいった
港のはなしになると、なかなか
「イエス」とはいわれない。私は
了して、この大雨を利用してポ
ートランドを抜け出るんだ。一
日でも早く日本に着けばそれだ
け余分のボーナスを出すぞ」
……と。
……と。
……と。

「そこにかく、もう一べんだけ
を直してくれ、頼む。こんな
……と。
……と。
……と。



「雨だー」まさに天の野
か。私は踊り上つてさう叫ん
らもハッとしたりさうな上つ
た。さうして、その夜、しつ
く雨を拵かしての必死の荷役が
進められたのである。その結
果、小麦を船腹(そう)一ぱい
積んだ巨船が、増水を利用し
て、無事コロンビア河を脱出で
きた。
なほ、この貨物船が、ポート
ランドを出港してから、約二週
間後に、名古屋港に到着した
が、あまり巨大なので、なか
か港にはいられず、船長はじめ
乗組員たち、非常に困惑したよ
うで、このことについては当時
の地元新聞紙上にも、かつてこ
のような巨大船が名古屋に入つ
たことはない」との記事が出て
いたと記憶する。当時、私はその
ときの乗組員たちの苦勞がうか
がわれて、なんだかあいますまぬ
ような氣持がしたものだ。

……と。
……と。
……と。

御立忘傳

落合豊一氏の巻

天職に生きる

(32)

落合豊一

正木契村画



日本向け小麦の第一便積出し
 の重大使命を終えて、大正十
 二にいて、さらに第二便、第
 二年もそろそろ暮れようとい
 う三便と、とうとう、三ヶ月間、
 十二月下旬に、勇躍、本社に帰
 ポートランドに滞在するうち、
 ったわけだが、どういもの
 当初計画していた小麦廿万トンを
 か、上夜も同僚も一向に喜んで
 ほとんど残らず、積出すことが
 はくれない。それどころか、サ
 ッパリ元気がない。いな会社全
 体の空気が、なにかこう重苦し
 休の空気が、なにかこう重苦し
 だ。私はしばらくは合点がいか
 なかった。だが、そのうち、し
 ないに事情が判りかけてきた。

だが、私は第一便の苦勞にこ
 りて、二度と二万四千トなどと
 いう向う見ずな巨船は使用し
 なかった。戻ったのは雨が降ら
 なくて自由なコロンビア河が
 航行できるような七、八千ト級
 の貨物船だったというわけだ。
 こうして、私はポートランド
 商店がなんと一歩一歩、破局へ

のだ。

の道をたどりつつも、たので

大正十三年もくれ、さらに十
 四年、十五年と過ぎたが、一向
 に社運ははん回されない。否、
 ますます左前になるばかり、最

さん下の五十いくつの工場は
 整理しようにも整理出来ず、赤
 早鈴木商店の倒産も時間の問題



字はふえる一方。加えて代金の
 とされるに至った。

回収はいよいよコゲつき、よう、
 社員たちの沈痛な表情。なに
 やく第二次世界大戦後の不況の
 アラシが、はげしく鈴木商店の
 上にもおぼいかなぶさってきた
 失業者となるかも知れぬとい

のだから、その当時のわれわれ

の悲壮な心中は、とてもでない
 がコトバにはあらわせない。

だが、われわれは最後まで闘
 うことを固く心に誓っていた。

そして、私ら海外派遣から帰っ
 てきた同志たちはとくにつと

て、真剣に社運はん回の対策、
 さらには今後の方針などを検討

し合った。その当時のつとどの
 会を『二月会』と名づけたが、

確か同志たちの数は廿名内外だ
 った。この『二月会』はいまに

至るも持続し、必ず年に一回
 か二回、その当時のメンバーが

集って、ありし昔の懐旧談に花
 を咲かせているが、帝国人絹会

最大屋菅三、三菱レーヨン社長
 賀集益蔵、神鋼電気社長中井義

雄、帝人製機社長小野三郎諸氏
 はみなこの『二月会』のメンバ

ーであった。

天職に生きる

(33)

落合豊一

正木 契 村 画



「二月会」も「食わんがため必死だ。経営者側ンバー懸命の社通はん回対策と、働くもの双方の深刻なかつも、JUNJUNに勝つては難い」とうは破局という運命の二字をうらもならず、ついに昭和二年四月、鈴木商店は倒産した。

「二千名にのぼる社員たちも同時に失業者として、世の荒波に取り出されたわけだが、ここで破産によって最後のソニンとなつたのはもちろん退職金問題。ところが、会社が破産したままになつては全然ねん出の余地もない。

「しかし、彼らも生きんがため、かあればどうする。われわれで

やがて、最高一人当り五千円まで、平均にして三、四千円見込みの退職金が支給された。私共も四千円程度の退職金をもらったが、まだしも、その当



たものだ。私はそのころ、倒産後の残務整理で毎日会社に出ているが、二、三十大金があるが、こんなところで気分転換として、しゃれようじゃないか」ということで、同僚五人とともに、八月上旬富士登山を試みた。

「から余斐店ならびに出張所職にまでヤキをばして、ロケつき代金の回収に全額ヤッキ、とうとう想像していた以上の資金を蓄積することができた。

時の四千円といえは生れてこのかた握ったこともないような大金。なんだか失職したというこのころ、結構愉快な気分を味

「御殿場あたりで一泊、朝モヤついでわれわれはワイスキー片手に飲んで登り、登っては飲み、大いに意気けんこう、八合目あたりへきたまではよかったんだが、そのあとがいけない。いままでワイワイはしゃいでいた友人たちが、しだいに静かになっていくではないか。ハーン失業者の富士登山はけいさか感傷的になつてきたのか」と思っているところだ、私の心臓までドキン、ドキンと激しく波打ってくるではないか。

天職に生きる

(34)

落合豊一



富士山の八合か、惺醒とかいふ暗い気分が目あたりになると、気圧の関係で非常に息苦しくなるのだが、たよりで、いまもその壮快な気さうとも知らぬものだからわれ分が忘れられない。

われの表情も深刻。そのうえ相当以上にアルコールが回っている、再び下界の苦しみを覚えるんだからたまらない。いやその苦しいことといったら。連中すっかり参ってしまった。

だが、頂上にとどりついて初めて気圧の関係だと知ったとき、一行のキョトンとした顔つき。しばらくは互いに顔見合わせて、笑いが止らなかつたといふしだいだった。

それとともにはるかに下界を見下ろしたときには、失業者と

だ。とくに小妻取引などという

れば、無償でこの研究資料を提供しようではないかと、三菱商事に全部はとれないが、なんとか三、四名だけにしてくれ」といふことで、篠原製糖部長以下、



鈴木商店の解散直前、製糖部員たちとともに、記念写真におよんだ。前列右から二人目が私、後列左から二人目島崎、三人目中川氏、ワク内は篠原部長

製糖の中川、シヤトルの島崎、ニューヨークの森本四氏が入社することになった。そして、その翌日、われわれ同志たちは、それぞれの往く道にしたがって、いさぎよくけつ別しよう

私にはほう大な研究資料を作成するところ、これらの海外派遺言十名を残らず採用してくれ

か」とのコトバをうけた。

獨立立志傳

落合豊一氏の巻

天職に生きる (35)

落合豊一

正木 契 村画



昭和三年二月 ようとの合コトバを胸に、闘志
 八日、日商株式会社が資本金百 満々スタートにのぞんだ。とき
 万円で設立されると同時に、私 あたかも、デフレ時代、不景気
 は神戸支店の穀類担当者として のドン底だっただけに私も死物
 入社した。さきの鈴木商店が買 狂い。ほとんど毎日のように深
 易と干場を同時に経営し失敗し 夜海外からはいつてくる電報、
 た例から、日商はあくまで貿易 情報などと取組んで、小麦を中
 一点張り。その当時の社員は本 心とした穀類の買付けに、売り
 店と、神戸並びに東京支店全部 に、血の出るような努力を私
 を集めても四十名たらずで、二 った。
 千名以上の社員をかゝっていた 一年三百六十五日、殆んど息
 鈴木商店とはくらべものになら づくヒマもない毎日の連続だ。
 ぬほど、スケールの小さいもの そんな重苦しい日々が一体何
 であった。だが、私たちはいつ 月、いや何年つづいたことだろ
 かは一流の貿易商社に發展させ うか。

そのころ、いな正権にいえば
 昭和六年、大森内閣が誕生した
 とまのことであるが、この年、
 を行った。国内はもとより、朝
 鮮、満州にまで買いの手を伸ば
 した。案のじょう、物価はド
 ン上る一方だ。私は小麦だけ
 に止らず、賣える物資はなんで



大森内閣誕生
 昭和六年

政府は金輸出の再禁止をなし、
 ために再びインフレのキザシが
 現れ出してきたのである。
 私はこの機、逃さじとばかり
 り、さかんに小麦の買ひアサリ

も買えとはかり、あらゆる方面
 に買いの目を光らせていた。
 すると、鹿児島にいた出張員
 某から「かんしょでんぷんがあ
 るかどうか」との連絡が届いて
 きた。私はちうちよせず、す
 ぐさま「買っちゃまえ」と、ある
 だけ金部、二千、一ぺんに買付
 けた。当時、私はでんぷんのこ
 となんかチンパン、カンパン。
 さっぱり予備知識もなかった
 が、それがいきなり三千、とい
 うべら樺なでんぷんを買いつけ
 たものだから、さすがにその道
 のクワウト筋たちもアッと驚い
 たよう。一躍、業界の話題にな
 ってしまった。だが、そこはそ
 の道のベテラン。ましてや大阪
 商人たちとては抜かりのある
 うハスがなく「いまに日商一買
 ったものの、売りさばくの弱
 って、安値でたたかれるデー」
 とばかり、いっか買いつくろ
 としない。こちらがシロウトと
 みて、彼らなめてかかってきた
 というわけだ。

郷土立志傳

落合豊一氏の巻

天職に生きる

(36)

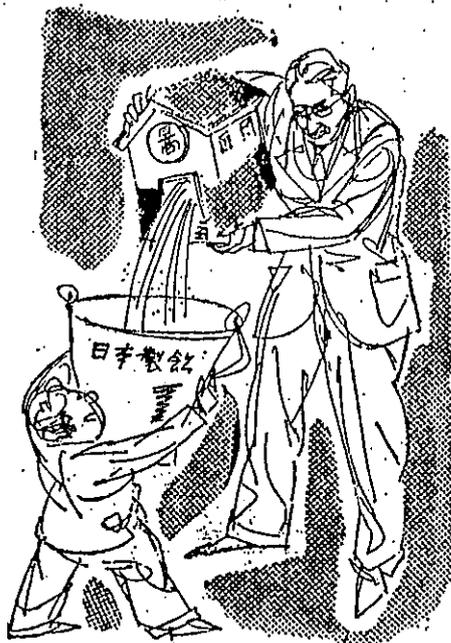
落合豊一

正木契村画



クロウト筋た んぶん「価格がどんどん下り出
ちの足なみはなかなかガツチリ
したものだ。さんさんこちを
らしておいで、最後のどたん場
で思いきりたごうというコン
タンらしい。私もこれには弱っ
た。あまく見ていたけれど、と
んでもないことになってしまっ
たと思ったが、もうこうなっ
は私も意地をなするのをえな
い。絶対クロウト筋なんかは
売れるものか」とばかり、なんと
一年余りも倉庫の中に、じっと
入っっぱなしたまま、ねばって
いた。ところが、かんじんの

きすがにこのときは相当な損
をしたわけだが、まあ何事か
よらず、はじめて字づくとすれ
ば授業料がいるのと同じよう



うになったし、このことが縁に
なつて、以後日本製船にとつて
は日商が一番大きな取引先とな
つたようだ。同時に従来まで
の九州で「でんぶん」買いつ

港に運び入れるという極めて合
理的な方法に改めた。
その結果、従来とは比較にな
らぬほど運賃も安上りで、「で
んぶん」取引きでは断然、他社
を押えて優位に立つことがで
きた。

に、この「でんぶん」取引にも
最初は授業料が必用だったワ
ケである。
しかし、翌年からはもう授業
料を払わずとも結構かせげるよ

私は「でんぶん」買いつけに
当つて、つねに国際貿易のやり
方でフェアをモットーとして
いたので、これまでとかく大阪
商人に、え湯ばかり飲まされ
ていた九州の製造業者たちも日
を追つて日商との取引きを望む
ようになり、昭和十年ごろには
九州一円はもろろのこと、四
国の愛媛から中園すしまではと
んどの「でんぶん」製造屋と取
引が進み、関西の「でんぶん」
の四〇%までをしめるようにな
つた。だが、私の本意は国内は
かりの取引きでなく、あくまで
国際貿易にあった。

御土立志傳

落合豊一氏の巻

天職に生きる

(37)

落合豊一

正木 契 村 画



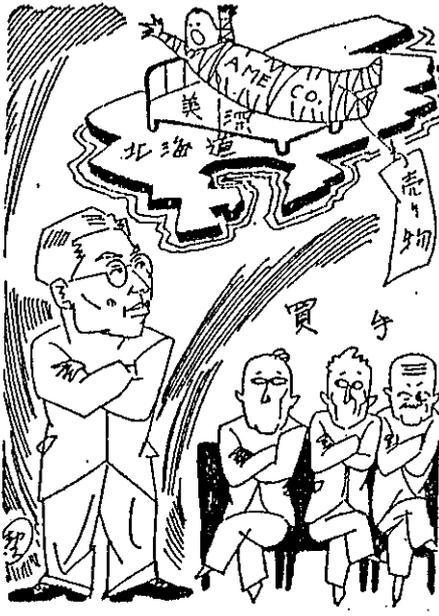
「でんぶん」で従前通りのヨリをもとすこと
取引がしたいに軌道にのるに
はさして離事でもなかつたよ
うだ。

私はずとしてジャワ、シンガ
ポールで、タバコカ(芋の一種)
でんぶんを買いつけ、これを織
物用のノリならびに食料用とし
てインド方面に輸出した。

こうして、私と「でんぶん」
とのつながりはますます深まる
一方、あけてもくれてもたと世
界のヒノキ舞台ばかりをユメ見
てきた私にとっては、たとえ小
妻より幾らかスケールが小さく

「でんぶん」
たが、この場合も初めて國際
易をてがけるのと違って、過
一、幾らかでも小妻部門の海外
引にたずさわっていたことが
常に参考になった。たとえは
半リス、インド、その他の海
商社とのつながりにしても、
「とえ小妻と」でんぶん」の違
こそあれ、同じ穀類部門とし

とも、この國際貿易への復帰は
なんにもまさる喜びだった。だ
が、このユメも長くはつづかな
かった。なぜならやがて大東亞
戦争がボツ殖、食糧の輸入、輸
ばれてきた。



わが國食糧自給政策の一環とし
て、イモの増産から、さらには
れを「でんぶん」化するのに必
死になったのと同じように、
私は昭和十六年六月、全國で
んぶん配給組合の理事長にえら
ばれた。

このイモからアルコールを作
り、これを航空燃料の一部とし
ても利用したというのだから、
当時の政府の力の入れ方も想像
以上といえよう。

そのころ北海道は美濃に、破
産したアメ会社の売り物がある
とのニュースを耳にした。北海
道庁が補助金まで出してパレイ
シ「でんぶん」からアメを作って
いたものだが、赤字につく赤字
で、とうとうお手上げになっ
てしまったもの。

それだけに、いつか買手手
はつかない。だが、私はこのア
メ会社をこのまま柄をきせてし
まう手はないと考へた。なんと
か合理的な運営方法がありそう
なもんだと、なぜだか、妙にこ
のことはかりが頭にこびりつ
てはなれない。

天職に生きる

(38)

落合豊一

正 本 契 村 画



美深のアメ会でも、絶対もうかる手段がある。社がなぜ倒産したか、一番大きな原因は何か。私はその原因を、もう一度、調べ直してみた。す

だ。なかなかウンといわない。おん」をまず乾燥させる際に、九州、四国ならびに本州でやっている天日乾燥とちがって、弊

い北海道ではこれを火力で乾燥させ、結局はその設備、燃料費に食われたというところがわか

使用したことが。：最初のう

さめた。いまでもこの会社は



て立派なアメが製造され、その

制されていないでんぷんはない

郷土立志傳 落合豊一氏の巻

天職に生きる

(39)

落合豊一



「彼岸はな」して、これをアルコールにつけ
 ぬらしたる「でんぶん」は繊維
 用のノリとして、私たちは取扱
 っていた。ところが大日本製薬
 が、さかんにこの「彼岸はな」
 を買取りとしてゐるではない
 か、「クスリと彼岸はな」一体
 はんの関係があるんだらうか？
 「「彼岸はな」を融通してや
 ってもよいが、一体なにに使う
 んだ？」

「このエッセンスだけ売ると
 私ばかり臭い風で聞いてみ
 た。いくら統制はやりとって
 も、さすがにこのエッセンスだ
 けは全然関係なかったのだ。そ
 こで在庫の「彼岸はな」の売り
 込みを全部中止して、これをそ
 ま返してもらった。さしてその
 まい話はな
 い。そのう
 え、これな
 ら「法」に
 もふれず、
 この一石二
 鳥の妙薬？
 のおかげで
 会社も大い
 にもうかつ
 たというワ
 ケだ。
 「でんぶ
 ん」と「ノ
 リ」という
 ことに関連して、私はその当
 時でかけた「コンニャク」売買
 のことを忘れ去ることには出来
 なかったようだ。

「このエッセンスだけ売ると
 私ばかり臭い風で聞いてみ
 た。いくら統制はやりとって
 も、さすがにこのエッセンスだ
 けは全然関係なかったのだ。そ
 こで在庫の「彼岸はな」の売り
 込みを全部中止して、これをそ
 ま返してもらった。さしてその
 まい話はな
 い。そのう
 え、これな
 ら「法」に
 もふれず、
 この一石二
 鳥の妙薬？
 のおかげで
 会社も大い
 にもうかつ
 たというワ
 ケだ。
 「でんぶ
 ん」と「ノ
 リ」という
 ことに関連して、私はその当
 時でかけた「コンニャク」売買
 のことを忘れ去ることには出来
 なかったようだ。



私が日商専務になってまもないころ、社
 内でレクリエーションがあり、開会のコ
 トバをのべているところ

のまゝ大日本製薬に売った。た
 だ繊維工場に売りまはがれてい
 ったのだから、全くこれ以上

残りの部分が、こんどは立派な
 「でんぶん」として、ドンドン
 繊維工場に売りまはがれてい
 ったのだから、全くこれ以上

その「コンニャク」問答とは？
 大東亜戦争もようやく末期に近
 づいていひつゝである。
 突然、徳島の美馬郡半田町一
 田で、コンニャクの荒粉(コン
 ニャク玉を切干したしたもの)
 があるが、どうかこの商談をう
 けたのである。このコンニャク
 荒粉についてはキンタマの砂お
 ろしとして妙効があるという
 ことぐらいは知っていたが、真
 のところ、それ以外、なんらの
 専門知識も持ち合わせてなかっ
 た。だが私は統制されてい
 ないというところ、郷里のコンニャ
 クであるというところが妙に魅力
 を感じて、あっさり、廿万円全
 部のコンニャクを買いたってし
 まった。あとで判ったことだ
 が、スフのしゅうとが大玉を買
 ったというところで、随分話題に
 なったようだ。

「このエッセンスだけ売ると
 私ばかり臭い風で聞いてみ
 た。いくら統制はやりとって
 も、さすがにこのエッセンスだ
 けは全然関係なかったのだ。そ
 こで在庫の「彼岸はな」の売り
 込みを全部中止して、これをそ
 ま返してもらった。さしてその
 まい話はな
 い。そのう
 え、これな
 ら「法」に
 もふれず、
 この一石二
 鳥の妙薬？
 のおかげで
 会社も大い
 にもうかつ
 たというワ
 ケだ。
 「でんぶ
 ん」と「ノ
 リ」という
 ことに関連して、私はその当
 時でかけた「コンニャク」売買
 のことを忘れ去ることには出来
 なかったようだ。

郷土立志傳 落合豊一氏の巻

天職に生きる

(40)

落合豊一

正木 契村 画



スフの素人が「え」とばかり、とうとう製粉すコンニャクを大量に買いこんだことに相成ったのだが、しょとあって、大阪商人たちはさきせんはスフのしろうとの悲しの「でんぶん」買いつけに見せさ。なんとタルク（石材）製造など同じような商魂たくまじき、屋で直接、ひきウスを借りて製で、案のじょう、一せいにたた粉したもんだからたまらない。き落しにかかってきた。こちら売りさばいたコンニャク屋かも意地だ、そう簡単に安値でたたられてはたまったものでない。うけてはからん。コンニャクにと、サチががんばったものの、時ならぬではないか」と物すごい日があつにつれ、いさか心細抗議をうけるし、さんさんの失くなってきた。エーイいっそ敗だった。

のこ、これを製粉して、直接 専門家にしらべてもらったとコンニャク製造家に売っちゃうころ、石ウスでかんじんのコン

ニャクのマンナン（分子）を又チヤクチヤに粉砕してしまひ、これでは弾力性がなくなるのも



功のもととなり、徳島、高知をはじめ、広島、長野、群馬、埼玉、茨城などの産地から大量に買ひ集めて大々的に製粉し、内地はもとより、満州、上海などにも輸出、一躍コンニャク界の

「気球爆弾」に切っても切れぬ役割を果すようになったのだから驚く。

「気球爆弾」についてはいまさらいうまでもないが、戦争末期の昭和十八年秋ころ、大きな気球に時限爆弾を仕掛けてこれを日本から亜成層圏をこえて、アメリカにまでとばそうというもの。この気球は和紙をはりあわせ、その表面にコンニャクのりを塗布するのである。ところがそのコンニャク玉もほとんどが食糧用に回されるとあっては軍当局が計画するコンニャクのりの大衆生産にはほど遠い。あけくの果てが鳴物入りで「コンニャクヤーイ」と懸命に探し回る羽目となった。

もつともたという。なるほど、いまがいますでマンナンなんて全然知らずじやったとは、おまそわが身の愚かさには愛顧もコンニャクのりの大衆生産にまで発展し、ついに敗色濃い日本の最

だが、この失敗もやがては成後の切り札?として登場した報を提供してきた。

そのとき、もと国際汽船の幹部で、マニラにも駐在していたという三浦玄二君が耳よりな情

卿士立志傳 落合豊一氏の巻

天職に生きる (41)



落合豊一

三浦君のい はさすがの三浦君もホトホト参
ら情報とほ「コンニャクなら心 ったらしい。あとでわかったこ
配ない。フィリピンに行けば時 とだが、山ろくとか傾斜地で陽
生のものがくもでも密生して の当らぬ場所。そのうえ氣候涼
いる』といひだした。

すべきまこのことは陸軍省に でないといふ「マンナン」の多いネ
報告され、時を移さず三浦君は、 バリのあるコンニャクはとれな
軍用機でマニラに飛んだ。なる い。ましてやフィリピンなど熱
ほど、フィリピンの村や、丘の 帯地域に優秀なコンニャクのと
草むらにはおびたしいコンニ ャク芋が繁植していた。ところが
ヤク芋が繁植していた。ところが 知らぬが仏。すべてはあとの祭
がそれを採集して処理してみた りだった。
が、不思議なことにコンニャク ともかくも、こうした曲折を
特有のネバリが全然ない。毎 へただけに「気球爆弾」のノリ
日、毎日採集してテストをくり つけも、原料難から容易に進ま
返して見たが同じこと。これに なかったようだ。そのうえかん



毎月一回、定期的に社内運動場集って 社歌をうたうことになっている (前列左 から二人目が私)

じんの「気球爆弾」の反響もサ 昭和廿年五月、ヘルリン陥落
ッバリ現われてこない。陸軍の のである。

いたというんたから我彼の真 力の差がうかがわれるというも
な決心でもあったわけだ。私は
神戸を離れるに当って、家族全
部を中国山脈の南側、宮本武蔵
の出生地で有名な岡山県の大原
町に移すことにした。そして、
私は東京の地に赴任した。だ
が、一週間をへた五月廿三日
と、一日おいた廿五日の大空襲
で支店は跡かたもなく粉砕され
てしまった。幸い私は支店員は
地下廿尺までも掘り下げた堅固
な防空壕のおかげで、どうにか
一命だけは助かったのだが。

失望したことももちろんのこと だ。当時29による本土空襲が
であった。だが、このとき海の 日まじに激しくなってきた折も
彼方のアメリカではすでに恐る 折をげに、東京に行くことはま
べき原子爆弾の試作に成功して るで死地にとびこむような悲壯
な決心でもあったわけだ。私は
神戸を離れるに当って、家族全
部を中国山脈の南側、宮本武蔵
の出生地で有名な岡山県の大原
町に移すことにした。そして、
私は東京の地に赴任した。だ
が、一週間をへた五月廿三日
と、一日おいた廿五日の大空襲
で支店は跡かたもなく粉砕され
てしまった。幸い私は支店員は
地下廿尺までも掘り下げた堅固
な防空壕のおかげで、どうにか
一命だけは助かったのだが。

☆ ☆

郷土立志傳

落合豊一氏の巻

天職に生きる

(42)

落合豊一



廿年の八月十日、ヤミをすれば下に働く連中五日。ついに大東亞戦争は終つた。同時に余く收拾のつかない果はいわずもがな。会社のため不安と混乱も増大してきた。日なんてことより、自分さえよければ本経済の立ち直りもまた極めて困難のようだ。世にいう「ヤミ屋」の横行が目にとりだしたのもこのころである。だが当時、専務の職にあった私は「ヤミ」だけは絶対会社の方針として禁じた。同業者間の一部では私のこのヤミ禁止に対して全くアホウ扱いにするものもあった。「あんなバカ正直で、こんな混乱した世の中が渡っていきけるか」と。だが私は絶対自分の信念をまげなかった。会社が

このことは十年を経過したいまになって、ハッキリ現われてきた。十年前「ヤミ」をやったものは結局は会社なんてメチャメチャ。ついに倒産の憂目にあっているのだ。「正しきものは勝つ」昭和廿九年十一月、私は日商社長に就任した際、このことだけは固く心にキザミつけていた。

思えば長かりし六十年の歳月。だが過ぎ去ったいまになってみると、昔のやまのうごこのこの恩恵に對してこそ、謝し

謝の気持ちなきはたい。私という存在もすべてはこの社会的恩恵の中にあつたればこそだ。謝と喜びをつねに感ずるのである。



「天職に生きることのみが私の最大の喜びである、……現在の私」

最後にいさか私ごとによれて汗顔の至りだが、この記録をつどり出してまもないとき、突然、父助右衛門の死を知った。なんとこの悲しみ。さきに母と祖母を失い、いまたかけがえのない父を失う。それもあまりの出来事に全くなすすべを知らなかつた。いくたび途中で筆を折ろうとしたことが。父の死という悲しみの中では私の記録などということは全く無価値にひとしい。そのよきな気持ちだ。だが私はすべてを忘れて、一度とつた筆をさらに進めることのみを努力した。つねつね「最後までやり抜け」と口ぐせのようにいっていた亡き父のトバと、そして、その面影をいつとしのびながら……。

ようたうごこのことが思い出されてくる。なつかしい限りを通過して、まず國家に寄与する。それとともに私を育ててくれた両親や祖母、そして社会的環境。その他ありとあらゆるすべての存在に私は心からなる感

(おわり)

